

岡崎 暉

イチローの広告を見ると必ず佐々木嘉則先生のお顔が浮かんできます。イチローは米国メジャーリーグで驚異的な活躍を続けている日本人野球選手ですが、風貌も含めてこのお二人には共通点が多いと感じます。イチローは他に迎合することなく自分を厳しく律し野球の技の向上に専心しているといわれています。佐々木嘉則先生も研究者・教育者としての技の向上に専心していらっしやったように思います。

佐々木嘉則先生が言語文化学会研究会に関わり始めたころ、会は、いわば消滅の危機に瀕していました。創始者の水谷信子先生、平田悦郎先生、本郷逕子先生がご定年で、続いて長友和彦先生がご郷里の宮崎大学への異動、村松賢一先生がご家庭の事情による退職などでキーパーソンを失い、会の屋台骨がぐらつき、会の存在意義自体が問われるといった時期にありました。そうしたなかであって、この会の立て直しに心血を注ぎ現在の形に育て上げたのが佐々木嘉則先生で、いわばこの研究会の中興の祖であります。研究会誌『言語文化と日本語教育』は、先生のご提案で投稿規定が大幅に見直され、査読の仕方や体制も整備されました。その結果、学術誌としての評価が得られるようになりました。同時に、春夏の研究会の持ち方も構造化され刷新されました。特に「開会のことば」では、パワーポイントなどのITを駆使なさり、半年間の研究会の歩みをひとつひとつ取り上げ、参加者とともに会の活動を総括するといったスタイルを定着させました。このような学術団体としての体裁を整えながら、同時に、もちろん、中身をつけることも緻密に追求なされました。佐々木嘉則先生以前の院生指導が「勘に基づく経験的指導」であるとしたら、先生の指導は「研究成果に基づく科学的指導」とでもいえるものでした。研究法について、たとえば、パワーポイントによるプレゼン技術をはじめ、研究課題の立て方やRQ表の作り方などが懇切丁寧に指導されました。研究会誌の別冊シリーズとして科研をとって、レビュー論文の執筆指導も含め原稿募集から査読、編集、配布（販売）まで一切をご自身でおやりになった『第二言語習得の最前線』はこの研究会を多くの人々に知らしめると同時に、第二言語習得研究の前進の原動力のひとつになりました。

このような研究者・教育者として達成されたすばらしいご業績を貫いていた佐々木嘉則先生の「哲学」は人間を合理的なものとして捉える人間観に基づいていたと改めて感じます。

おかざき ひとみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科